



■主な内容

- 第47回海外交流の会報告 “韓国の魅力に触れる”
- 特集：“乗り超える力” — 魅力的なリノベーション —
- 雨煙別小学校 — 開拓精神が育む —
- アルテピアッツァ美唄 — アートのカー —
- 日本大通 — 賑わいのある都市景観の創造 —
- レンガを愛して — 鬼頭日出雄氏インタビュー —
- 煉瓦のある2つの景観

- ASWA 組の活動
- 災害復興見守りチーム 活動報告
- 世田谷区本庁舎等整備審議会報告
- 会員の本



初雪のアルテピアッツァ美唄  
(写真 渡辺 2009.11.2)

第47回海外交流の会報告  
“韓国の魅力に触れる”

大崎 友記子 OSAKI Yukiko



富井正憲講師 (写真:井出)

9月26日(土) 神奈川大学にて、2010年UIFA 韓国大会に向けて、富井正憲氏を講師にお迎えして講演会が催されました。「漢城、京城、ソウル、三時代の建築」という題で、宮殿、寺院、書院、韓屋等の伝統建築、歴史建築の保存、復元、再生事業、国内外の現代建築家の作品を200枚近いスライドで解説して頂きました。会員外の方も大勢参加され、韓国に対する関心の高さが伺えました。

風水の流れを止めるために建てられた日本総督府

ソウルは朝鮮王朝を建てた李成桂がこの地に都を移し、以来600年間都として繁栄を続ける風水都市で、四周を山に囲まれ、中央には漢江が東西に流れています。日本の植民地時代には、風水の流れを止めるように日本総督府が建てられたそうで、それは宮殿の目の前でした。また、城壁内に入植して日本人街を形成するという「他人の家に土足で上がる」ような植民化だったとのこと。

現在のソウルは漢江を挟んで北側が旧市街、南側は1970年以降急速に開発が進んだ新市街に分けられ、さらに進行中なのが、地域性を活かした明確な4つの南北軸を形成する都市計画です。江南地区の高層建築群には圧倒されましたが、心惹かれたのは「宗廟」の美しさでした。又「廟」は亡くなった王や王妃の精神を祀

る場所になり、「陵」が肉体を安置するお墓になるという興味深いお話と、今もなお風水信仰が現代の建物や生活と深いつながりがあることを教えて頂きました。

儒教と自然を享受した住宅

伝統的な住宅＝韓屋では、儒教の影響を受けて男の空間と女の空間が分けられており、内棟(アンチェ)と舎廊棟(サランチェ)を別棟にし、内部は開放的な構造の板の間と、寒さに対する閉鎖的なオンドル部屋が共存しているという、空間構成にも興味を覚えました。日本と同じ木造建築でありながら、自然木を上手く配置し、木材よりも土を多く使うことで、おおらかで温かみのある建物になっていると感じました。

一方、復元され市民の憩いの場所ともなった清溪川やマリオ・ボッタ、ジャン・ヌーヴェルのサムスン美術館 Leeum やドミニク・ペローの梨花女子大学キャンパス・センターも、是非訪ねてみたいと思いました。

お隣の国でありながら、なかなか建物や文化に触れる機会がなく、2010年の韓国大会が楽しみです。



旧城壁内の宗廟と、ソウル市街を臨む陵 (写真 富井氏提供)

The 47th Intercultural Lecture, “The Architecture of Three Eras: Hanseong, Gyeongseong and Seoul” by TOMII Masanori

OSAKI Yukiko

UIFA Japon held its 47th intercultural lecture on Sept. 26, titled “The Architecture of Three Eras: Hanseong, Gyeongseong and Seoul.” by Prof. Tomii Masanori. Professor Tomii used nearly 200 pictures to illustrate Seoul’s historical and modern architecture, and current conservation and rehabilitation activities.

Seoul, a feng-shui city, was developed as a capital 600 years ago. It is surrounded by mountains and divided by the Hangang River, which runs east-west through the city. The old city is located in the north and the south part has been developed since the 1970s. The beautiful Jongmyo is located in the old city. It was interesting to know that the Myo is dedicated to the spirit of the forefathers of the royal family, and that the Ryo (mausoleum) was built to bury the body.

Due to Confucianism, traditional houses were separated into male and female areas. Their spatial composition is also interesting, with open, wood-floor rooms and closed ondol rooms. I am looking forward to visiting Seoul to see the new oasis Cheonggyecheon, as well as modern architecture such as the Leeum Samsung Museum of Art and the Ewha Woman’s University Campus Center.

第48回海外交流の会のお知らせ

「韓国文化への扉 アンニョンハセヨ！」

講師：原田 美佳

(大韓民国大使館 韓国文化院 図書映像資料室長)

日時：2009年11月28日(土)

韓国文化院 見学会及食事会

11:00 ~ 13:00

講演会 14:00 ~ 16:00 (13:30開場)

場所：見学会及食事会 韓国文化院正面玄関集合

講演会 韓国文化院 6階

※ 東京メトロ丸ノ内線「四谷三丁目駅」徒歩3分 (A.T.)

**特集趣旨：**「魅力的なリノベーション」シリーズで紹介してきた事例を振り返ると、住民に愛されてきた建物がその役割を終え、新たな機能を持つ地域の拠点として再生した例、個人住宅が地域の文化拠点として開かれた例、建物の質の向上が地域を変質させた例や住宅地の持続・再生と一体となった例、というように、“魅力的”であることと“地域”との結びつきは強く、そのいずれもが地域の景観に時間の蓄積を与え、風景を豊かにしていた。

建物を存続させ、リノベーションを実現するには大小の困難が立ちまわっている。各地で苦戦が続いている中、困難を乗り越えさせたのは、それぞれの建築自体が持つ力にもまして、地域との結びつきの強さのようだ。

この特集では“魅力”とともに“乗り越える力”についてさらに考えるため、地域との特徴ある結びつき方を示す3つの事例を取り上げる。加えて、リノベーションを触発する有力な素材であるレンガに着目する。文明開化の象徴として親しまれながら、関東大震災によって建築工法から姿を消したレンガが、なぜか私たちを惹きつけるからである。（在塚 礼子）

（このシリーズは、各地の会員による自作あるいは推薦事例の掲載をもうひとつのねらいとしています。ぜひご応募ください。ニュースレター 75号参照。）

**Notes:** In this issue, we argue the feasibility of renovation and introduce specific cases of Attractive Renovation, which are distinctively and closely related to the local communities. We claim that these successful renovations are more the result of community involvement than the potential of the structures. Our previous articles on Attractive Renovation demonstrated how each renovation project contributed to the local community's historical features and enriched the landscape. This time, we look at brick structures because it never fails to fascinate us. Brick construction has been one of the keys to renovation and represents *Bunmeikaika*, Japan's Westernization movement during the Meiji era, and is cherished by citizens. However, sadly, most brick buildings were demolished after the Great Kanto Earthquake. ARIZUKA Reiko (K.N.)

(Send us your articles introducing your own Attractive Renovation.)

## 雨煙別小学校

— 開拓者精神が育む —

渡邊 喜代美 WATANABE Kiyomi

### 保存再生への長い道程

室蘭本線「栗山駅」から車で数分、旧栗山町立雨煙別（うえんべつ）小学校を訪問。1899（明治32）年開校の雨煙別小は、農業入植者の増加や隣接する夕張炭鉱の繁栄やらで児童が急激に増加し、1936（昭和11）年に木造2階建て新校舎に建替えた。1998（平成10）年この校舎を閉校してから10年、町は保存か、売却か、解体か悩み続けてきた。地場産材の松と唐松が主たる建築で堅牢であったが、台風の被害もあり、さすがに10年の空白はぎりぎりの忍耐であった。全盛時代人口9万から1万4千人になった小さな町は、町の財政で本当に保存が可能か、保存の場合の支援制度はないか、廃校活用を希望している団体はないか、悩み、模索し、役場で、地域で、町民たちで意見を交わし続けた。

### NPO 運営とコカ・コーラ教育財団の支援

2008（平成20）年“雨煙別小学校の活用を通して、次世代育成・環境教育・文化スポーツの促進”などをミッションに「NPO 雨煙別学校」を設立、コカ・コーラ教育財団の支援1億8千万円を得るところに漕ぎつけた。そして2009年夏、再生利活用「雨煙別小学校・コカ・コーラ環境ハウス」が完成。基金が原資で町の財政負担はない。運営は「NPO 雨煙別学校」。専門家として再生を担ったのは「象設計集団」である。

特記すべきは住民参加。延べ1500人余の町民や支援者が参加、傷みきった外壁の新しい壁板の一枚一枚を塗装した。住民ニーズを基礎に、公益法人、町、NPO、住民、専門家が連携し難度の高いプロジェクトを成し遂げた。

今、更なる再生利活用の続きが準備されている。学校からデッキで川に向けて舞台をしつらえるのだという。その先には広々と北海道の大地が広がっている。訪問した日は初雪に覆われた校庭にきれいな赤い外壁が実によく生えて、初冬のくすんだ風景を生き生きさせていた。再生に終わりはない。美唄も雨煙別小も楽しみ満載である。

### 栗山町でのすばらしい人たちの出会い

さて、雨煙別小と人の出会いを特筆したい。もちろん、すべて初対面。まず札幌駅バスターミナル16番、職員の渡邊さんの父上は雨煙別小用務員だった。さてさて、バスで栗山駅に到着、その建物「EKI」がいい感じ。合築されていた市民のための多目的室、



上：雨煙別小学校の外壁は1500人の手で赤（ステイン原色赤16：青1の調合色）く塗装された。

右：2階の床をはがし、吹き抜けとした食堂には、くっきりとした日差しが注いでいる。



喫茶、地場の生産物などが置いてある交流空間があり、「第42回栗山町芸能祭」中。そこで出会った「森勝さん」80歳。元町会議員。教育委員会のト部康雄さんなどもいて話が弾んだ。なんと森さんは1936年新設校舎に入学。雨煙別小卒業生。突然！案内を買って出てくれた森語録はすごい。雨煙別小学校のこと、町の運営、介護保健施設には国内外の視察を建設運営に生かした話、「EKI」も町の人たちが議論し建設したこと、鳩山神社や小林酒造のことまで多岐に渡った。雨煙別小の案内はNPOの茂野さんと役場の竹中さん。竹中さんは、雨煙別小が面白く、うれしく、臨時職員を続けている。介護施設「ガーデンハウス」の山岸さんも好青年。100年を超えるレンガ造小林酒造と木造の屋敷も驚きの連続。当主小林米三郎さん80歳、夫人72歳は、屋敷をパブリックにすることも考えている。人々から人間のよさ、開拓精神が、民主的な風土や気質が伝わってくる。穏やかな時間の流れは実に豊かであった。

## アルテピアッツァ美唄 —アートのカ—

中井 和子 NAKAI Kazuko

「アルテピアッツァ」とは、イタリア語で「芸術広場」を意味します。北海道美唄市生まれの彫刻家、安田侃氏の大理石の彫刻群を、周辺の豊かな自然のランドスケープと融合するように配置する広場と、廃校となった栄小学校の古い木造校舎と体育館の存在が面白い雰囲気を出している芸術による交流広場です。安田侃氏は、現在、北イタリアのパトラスンタにアトリエを構えている国際的に活躍する彫刻家です。

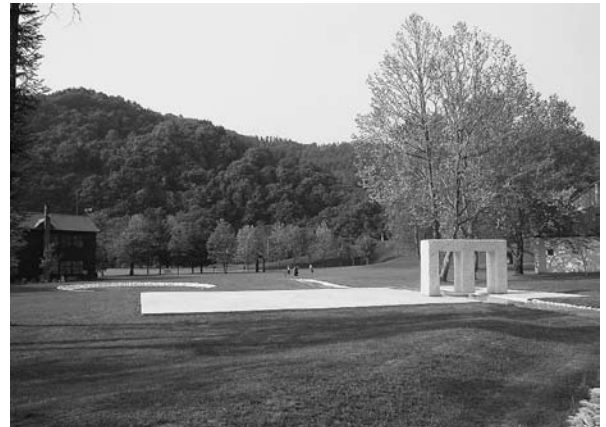
美唄市は、札幌から北に向かって特急列車で約40分程走った田園地帯にある人口約2万7千人の都市です。1956年頃の美唄市は9万人を超える人口があり、戦後の日本の工業成長に呼応して、三菱炭鉱と三井炭鉱の二大財閥が盛んに石炭を産出していました。三菱炭鉱で働く人々の子供達が通っていたのが栄小学校です。時代の流れはエネルギー源が石炭から石油に移り変わり、1963年の三井炭鉱の閉山に続き、1972年には三菱炭鉱も閉山しました。職場を失った多くの炭鉱労働者が美唄から転出して行き、1981年には栄小学校も、幼稚園部分を残して閉校となりました。

当初は小学校の体育館内などを、安田侃氏の彫刻を保管する場所として使用しているだけでした。その後1991年頃から美唄市は、木造小学校の風格そのままに体育館内の改修を行い、アートスペースとして安田侃氏の彫刻を展示するようになります。旧栄小学校の方は、2階の間仕切壁を取り払い天井の洋小屋組みを見せるように改修して、安田氏の常設の彫刻展示ルームと、市民ギャラリーも開設されています。幼稚園は旧小学校舎の1階に併設されていて、彫刻群は子供達の身近な存在となっています。

広い運動場にも安田侃氏の彫刻が、緑の自然と地形の起伏に溶け込むように配置されていて無料で市民に解放され、子供達の遊び場にもなっています。廃校の体育館と小学校と運動場が一体となって、芸術性ある豊かな広場「アルテピアッツァ美唄」を、少しずつ実現させてきました。

現在は、NPO法人「アルテピアッツァびばい」が運営管理を行なっています。資金源は、会費、寄付金、助成金、利用収入、カフェ、ミュージアムグッズ等だそうです。時々イベントでは、約300人が入る体育館内でのジャズやピアノのコンサート、彫刻のワークショップなども開かれています。アルテピアッツァの一隅にはカフェが開設され、来訪者との情報交換の場として利用されています。市立幼稚園の方は入園者の希望が多く、地域の子供たちにも人気があるそうです。

「アートのカ」による地域の再生といえるでしょう。



上：豊かな自然の中にあるアルテピアッツァ美唄

右：校舎2階の安田侃常設ギャラリー。天井ボードを外し、洋小屋組みを見せている。



### ワークショップ参加記



安田侃氏

(写真 渡辺 井出)

リノベーション事例で使う側の実体験をしようと「安田侃のこころを彫る授業」に参加した。3日間のワークショップだが1日だけの参加も可能だという。フレキシブルな対応は運営側には大変な筈。頭が下がる思いだ。我々は後半の1日半に参加。小さな体験工房は抽選を勝ち抜いた40名の参加者でいっぱい。皆、黙々と鑿とハンマーで或はヤスリで石と語り合っている。リピーターも多いそうだ。我々(井出、石川)も先ず「自分に似合いそうな」石を選び、生まれて初めて鑿とハンマーを握りしめた。石と向き合う時間は過去も未来も煩わしい現在もなく、ただこの瞬間だけがあるという安田氏の話の通り、ひたすら石を通して自分を発見する。奇しくも降り積もる初雪に景色も白一色。自分も白くなるような、白の中に自分の色が明らかになるような時間であった。(石川和代 ISHIKAWA Kazuyo)

## Uenbetsu School: Revitalization with Pioneering Spirit

WATANABE Kiyomi

The Uenbetsu School in Kuriyamacho, Hokkaido, opened in 1899 and was closed in 1998 following serious depopulation. The two-story wooden schoolhouse, built in 1936, has just undergone renovation. Suffering from economic depression, the small town of Kuriyamacho struggled with the question of preserving this schoolhouse. In 2008, the Coca-Cola Educational Foundation provided a 1.8 million yen grant to found the Uenbetsu NPO. Its goal is to bring the area's seniors together with children, developing environmental education through cultural and sport activities in the schoolhouse. The architectural firm Team Zoo as well as the local municipality and the residents took part in the project initiated by the NPO. (T.A.)

## Arte Piazza Bibai: Power of Art

NAKAI kazuko

The Arte Piazza Bibai is a sculpture park in Hokkaido where the marble sculptures of Kan Yasuda, an internationally renowned sculptor who was born in Bibai and is active in Italy, are exhibited in the restored Sakae primary school and its schoolyard, surrounded by mountains. Bibai used to be a coal-mining city where the Mitsui and Mitsubishi mining companies were located. Mitsubishi miners' children attended the Sakae School. After the Mitsubishi mine was closed in 1972, the area suffered from critical depopulation and the school was closed in 1981, except for its kindergarten.

The City of Bibai restored the two-story wooden schoolhouse and the gymnasium to exhibit the works of Kan Yasuda. The schoolhouse also has a citizen's gallery on the second floor and the kindergarten on the first floor. The art plaza, including the restored schoolhouse and gym, where sculpture workshops and jazz concerts are held, is currently managed by the NPO Arte Piazza Bibai.

This is a good example of local revitalization by the "power of Art." (T.A.)

日本大通り

— 賑わいのある都市景観の創造 —

佐藤 由紀子 SATO Yukiko

横浜市は先進的な都市計画の実績が多い事で知られているが、中でも日本大通りは開港以来の横浜の歴史を偲ばせる落ち着いた街路景観を維持しながら時代の要請にあわせて再生している。この街区がどのようにして実現されてきたのか、その取り組みを横浜市役所都市デザイン室に聞いた。

横浜公園と横浜港の象の鼻地区を結ぶ全長 430M の日本大通りの銀杏並木沿道には神奈川県庁本庁舎、横浜開港資料館など歴史的建造物が集積し、13.5M の幅員（植栽帯 3.6M を含む）をもつ日本屈指の歩道にはオープンカフェが並び魅力的な景観を形成している。

「日本大通り」の変遷

「日本大通り」は外国人居留地も飲み込んだ 1865 年の「豚屋火事」を契機に幕府と欧米列強外交団との間で防火帯を兼ねた街路として計画されたもので、完成は明治 12 年（1879 年）に遡る。英国人技師 R.H. ブラントンが設計した道路は 12M の市道両側に 3M の歩道と 9M の植栽帯を有し、全体幅員が 36M もあった。関東大震災後の復興整備時には道路幅員が 22M に拡幅され、歩道は縮小された。その後 2004 年に開業する「みなとみらい線」日本大通り駅の開業や「日本大通り地下駐車場」の整備をきっかけに歩道を創設期の幅員に戻す事が構想され、これらの事業に先駆けて 1999 年度か

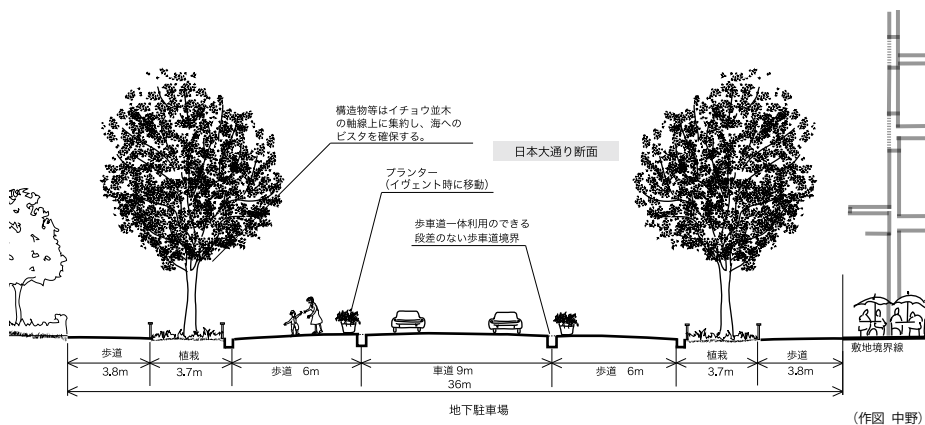
ら再整備が行なわれる事となった。市内で最も広い幅員の歩道を備えたシンボルストリートとなる現在の姿は 2002 年 5 月に完成した。

この通りの目指すもの

再整備では、「歴史的景観を活かした風格あるデザインへの導入」、「港へのビスタラインを感じさせる景観軸の形成」など 5 つのコンセプトがある。中でも「賑わいを創出する舞台」の項はハードの整備にとどまらず空間をいかに使いこなすかというソフト面の検討が同時にされている点で注目に値する。実際、2002 年以降、様々なイベントの開催により多くの人々が訪れ、また、日本では難しかった歩道のオープンカフェも短期間のイベントから継続的な活性化事業として今日に至っている。

伝統と風格ある街並景観の実現にむけて

様々な取り組みの実現の為に都市デザイン室が自ら地権者や関係省庁等へ地道な働きかけや協議を重ねており、彼らがデザイナーやプロデューサーとして「質」にもこだわりをもってリーダーシップと情熱で積極的に事業に関わっている事が伺える。また、それらを実現するために地区計画や助成制度の策定、新たなルールづくりなど実用的なツールも同時に用意することで魅力的な都市景観創造の裏付けを確固としたものにしていく。こうした努力と成果の積み重ねが市内のみならず、市民との信頼関係を築き、まちづくりや協働の精神を培い、ひいては街並形成に結実しているといえよう。



デザイン性を重視したテントが並ぶオープンカフェ

(作図 中野)

A Wide Street with a Long History

SATO Yukiko

Yokohama is the first harbor that opened to foreign ships after Japan's long isolation. The city's main street, named Nihon Odori, is located in an area showcasing the country's architectural heritage. The street was designed about 90 years ago by English engineer R. H. Burton to create a fire boundary between the foreigners' area and the Japanese area.

In spite of a few changes as a result of the Great Kanto Earthquake and WWII, the street's 36 m width has never changed. It now has 12 m for traffic, 12 m for pedestrians and plants on both sides. From 2002, new public parking just under the street complements a new subway station. Seasonal events and open cafés (which are rare in Japan) are well-attended.

The Yokohama City Design Office has really focused on creating an attractive city. It has achieved many projects through patient

negotiation for more than 30 years. The Minato Mirai entertainment district and Nihon Odori are good examples of their success. (N.A.)

Adoration of the Brick

MATSUKAWA Junko

It is difficult to preserve historical buildings in Tokyo, especially those made of brick. We had a casual lecture from Mr. Hideo Kito, who experienced the Great Kanto Earthquake in 1923 in his mother's womb. His grandfather and father were both brick artisans.

The Japanese word for brick, renga, essentially means "handy size." It was once women's work to carry 60-g loads of 24 bricks at a time to the site. The typical brick size, called onama, was sometimes shaved down to 75% of the original, called shichigo. Shichigo bricks were stronger than onama bricks, but more expensive. The British style was to use onama so there wouldn't be any waste, but the building was weaker.

## レンガを愛して…

— 鬼頭日出雄氏インタビュー —

松川 淳子 MATUKAWA Junko



鬼頭日出雄氏

建物の保存・再活用への挑戦は、現在東京では、ほとんど「連戦・連敗」といってよい状態が続いている。もちろんいくつかの優れた例はあるのだが、その陰で壊されてしまった大切な建物は枚挙にいとまがない。レンガ造

となると、もはや東京には倉庫や工場すらみかけることが出来なくなった。広報チームに同行してレンガ職人・鬼頭日出雄さんにインタビューした。2003年1月以来の再会だったが、変わらずお元気な様子を見せてくださった。

鬼頭さんは「おふくろさんのお腹の中で関東大震災を経験した」というから、大正12(1923)年生まれ、今年86歳になられたはずである。お祖父さんは明治34年に名古屋から上京、レンガ職人となり、お父さんもあとを継いだというわけで、鬼頭さん自身はレンガ職人としては3代目、タイル職人としては2代目になるのだそうだ。

建築大辞典によると、レンガが日本で最初に作られたのは1850年佐賀藩の反射炉築造のとき。また、レンガ構造の建築は、明治以来外国人技師の手で行なわれ、日本人建築家のものとしては辰野金吾の阪本町銀行集会所(1885)が最初のものになるという。関東大震災によって地震に対する脆弱さが露呈し、翌年の市街地建築物法施行規則改正により、レンガは被覆材や化粧材としてのみ残るといふ運命を辿った。

「レンガ=brickの語源は『手ごろな塊』というところから来た。大きさと重さは、左手で回して欠けのない表面を出せる…現場でレンガを運ぶのは女性の役割、24本つまり60キロを背負った。米一俵と同じだね…加工しないレンガを『お生(なま)』といい、その75%の大きさのものを『シチゴ』といった…いい仕事はシチゴでやった。強度は出るのだがくずが出

The pay for a brick artisan was so high that they could have fun with Geisha in Atami or Awaji. Mr. Kito took over his father's job to build furnaces used to make anko (sweet bean jam). "It is hard to guarantee whether a new furnace works well, so I declined to accept pay before completion."

Brick buildings were first designed by foreign architects, beginning in 1850 with a reverberatory furnace. TATSUNO Kingo is the first Japanese architect to use brick, for a bank hall in 1885. After the Kanto quake, brick structures were no longer trusted and the law changed to allow brick only in exterior ornaments or materials.

Mr. Kito calls himself a "Brick-work Navigator" and continues his research into brick and brick buildings. (N.A.)

る。イギリス積みは、角に羊羹を使うので、くずは出ないが、強度も出ない…東京駅の釉薬レンガは辰野金吾が持ち込んだ、はじめ赤レンガにかけてみたが、うまくいかず、耐火レンガにかけて成功した…東京駅の北側、日本工業倶楽部など全て墨田の八広にあった鳥井製陶の製作だ…タイル職人の手間賃はよく、淡路島、熱海などで芸者をあげて遊びほうけた…三平建設の仕事をした。お祖父さんのおとくいさんをひきついで、アンコ屋さんのかまどをつくるなどの仕事をした。かまどは燃してみないと出来がわからない、お金を先にもらってしまうと仕上げるのが億劫になってしまうので、燃してみてもうまく行ったらお金をもらうことにした…」などなど、鬼頭さんのお話は自在に時空間を駆け巡り、頭の中に年表を持っていないと、しっかり捉えることが難しい。

レンガにまつわる貴重な資料を集めて、鬼頭さんは、ご自宅を「鬼頭燐文庫」として研究を続けられ、ご自身を「ブリックワークナビゲーター」と名乗られている。レンガという素材への限りない愛と、職人の手への信頼・自負が伝わってくる鬼頭さんのお話だった。

## 煉瓦のある2つの景観

## Two Historic Brick Factories Preserved for Local Landscape

## 洲本市の新都心計画 A New City Center for Sumoto



(写真 井出)

淡路島洲本市にある鐘ヶ淵紡績工場跡の煉瓦造4棟は、市民の熱望と、学識経験者の提案で、洲本市新都心計画として、図書館へ、レストラン、美術館として、保存再生された。阪神淡路大震災(1995)にあっているが良い保存状態だったところ、1998年、赤煉瓦の外壁や解体材料を用い、鬼頭梓設計による市立図書館が開館。(井出幸子)

## トヨタ テクノミュージアム 産業技術記念館

## Toyota Commemorative Museum of Industry and Technology



(写真 石川)

「モノづくりの大切さ」を次代に伝えるシンボルとして1994年に開館。1918年に豊田紡績が赤煉瓦造りの工場を名古屋市内に建設。工場群は1982年まで操業を続けた。中心の「動力の庭」から見ると、高さ9mの煉瓦壁には鋸型屋根の痕跡と、紡績工場特有の綿ぼこりや糸くずを外へ吸い出す「塵突」が往時をしのばせる。(中野晶子)

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2009年11月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS  
OF QUANTITY OF LIFE  
DAINI-OSHIDA BLDG.  
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU  
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861  
FAX :+81-3-5275-7866

## ■ ASWA 組の活動 ASWA Team Activities

自分らのトイレに飾るアートミラーを作ろうと、小つぶな硝子タイルをいっぱい集めました。そのカラフルな光の世界に、子ども達が眼を凝らして小ぢな鏡を作りました。個性豊かなアートの世界が91枚の鏡の中に拡がり、自分の顔も映しました。

### 「きらめきとかがやきのアートミラー」に参加して Attending "Brilliant and Glittering Art Mirror"

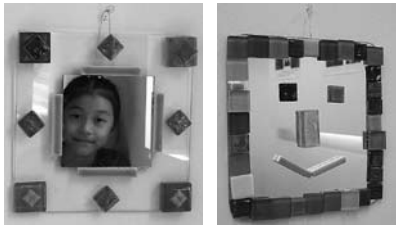
齋藤 優衣 (中学1年) SAITO Yui

夏休みも終わりに近づいた8月20日、私は家族と一緒に区内にあるZAIMまで行きました。硝子タイルを使ったアートミラーを作るためです。

ZAIMの建物に着くと、色々な衣装を着た人がいて、少しびっくりしました。ASWA組のギャラリーに入ると、何人かの子ども達が静かに硝子タイルを鏡に貼付けていました。どの子供も真剣な表情です。

私と妹もそれぞれ一枚ずつ鏡を受け取り、アートミラー作りに取りかかりました。私は夏だったので涼しい寒色系にしようと思いましたが、どんなものを作るかすごく悩みました。妹は赤いタイルを使ってどんどん作っていました。ASWA組の方々が親切に教えて下さったので、私達だけの鏡が出来上がりました。

鏡作りが終わった後、赤い靴のバスに乗ってY150に行きました。とても充実した一日でした。私の部屋に飾ってある鏡を見るとその日の楽しい思い出がよみがえります。



(写真 岩崎)

☆お願い：ASWA組では、今年度中に3校の中学校のトイレをART化します。横浜市市民生活推進課と、我がUIFA JAPONがバックアップしています。活動にご協力いただける方をお待ちしています。  
中野：the-nakanos@nifty.com

## ■ 災害復興見守りチーム 活動報告

### Supporting Team for Disaster Area

安武 敦子 YASUTAKE Atsuko

我々が継続的に支援している法末集落(新潟県長岡市)は9月に稲刈りを終えました。さてこの度「住まい・まちづくり担い手事業」にUIFA JAPONとして応募し採択されました。テーマは「伝統的の家屋のメンテナンスノートの作成」(家々の実測や診断を行う活動)です。また、山本佳代子委員の推薦により、平成21年度の環境共生活動賞(日本環境共生学会)を受賞しました。選考理由は、①活動が住民とともに展開し、活動が長期的・継続的である ②集落の特徴を活かして復興の方向を導き出している ③景観や環境に対する普及・啓発活動を行っている ④高齢者の生きがい活動と連動している ⑤復興の方向に「環境共生」の視点がある ⑥庭先から集落全体までの視点が一体化している ⑦具体的な作業を伴いながら実践されている ⑧地域の環境をまるごと支える取り組みとなっている一です。なお、法末の2010卓上カレンダーを300円で提供しています。今後もご協力ください。

## ■ 役員会報告

第5回 9月11日(2009年) 総会記念講演会収支報告、会報第81企画報告、第47回海外交流の会参加申込み状況報告とスケジュール確認、第48回海外交流の会の準備状況報告、パンフレット製作及びホームページ設立についての進捗等が各委員会より報告された。

第6回 10月13日(2009年) 第47回海外交流の会開催結果報告、第48回海外交流の会準備状況報告、災害見守りチームの日本環境共生学会「環境共生活動賞」受賞報告、会報81号作業状況報告、10月以降入会者の入会金減額の検討・了承、各委員会等の活動報告の他、IAWA設立25周年に際しUIFA JAPONの協力申し出が決定された。

## ■ 世田谷区本庁舎等整備審議会報告

### Report: Setagaya City Hall Reconstruction Council

在塚 礼子 ARIZUKA Reiko

ご報告が遅れましたが、世田谷区本庁舎等整備審議会は「一部または全部の改築が必要。ただし、財政状況を踏まえ、区民の理解を得ながら進めるよう。」という答申を出して終了しました。「庁舎に文化は不要」という多数意見に対する有効な術を持ってないまま、少数意見は添付書類に記されるにとどまりました。これから区民の出番になるのか。これまでのご支援に感謝いたします。

## ■ 会員の本 Member's Publication

### アメリカの名作住宅に暮らす

田中 厚子 著  
建築資料研究社"Living in Great American Houses"  
by TANAKA Atsuko

飯田とわ IIDA Towa

この本は、「カルフォルニアにおける日本建築の影響」研究や、「アメリカ文学に見る住まい」など、幅の広い検証に裏打ちされた田中さんならではの北米住宅史から始まる。

ライト、ノイトラ、シンドラーらの手掛けたアメリカの近代住宅16件を取材し、住人へのインタビューを交えながら、それぞれについて解説している。住人は、親や自らが建築家に依頼し今も同じ場所に住む人や、縁あって何代目かの住人になった人。窓の再生にレプリカを制作するなど、竣工当初の状態に復元することへの努力を惜しまないと同時に、自分の生活スタイルに合わせて新たに手を加えてもいる。住まい手と建築家のコラボレーションで、それぞれの作品が生きてきていると感じる。

建築家とのエピソードや修復の苦労話などを読んでみると、住む人の暮らしが加わって、建物のぬくもりが増したようにもみえる。

こういう事例が増えたら、日本の住宅ももっと面白くなると思いながら読み進むうち、私の住まいと事務所がある建物(築約70年)のオーナーの顔を思い出した。有名建築家によるものではないが、使い勝手の向上と、竣工当時のデザインの踏襲を意識した改修で現在に至る。彼女にも是非読んでもらいたい1冊だ。



## ■ 編集後記

以前鬼頭さんから伺った石貼りの端の処理を日本橋に見て感動(飯田)。日本の庭石は皆、仏なのだ、昔聞いた話を思い出しながらイタリアの石と向き合いました(石川)。ケニアの半乾燥地域では今度の雨季がたくさん命にかかっています(古村)。Hooray for beautiful community revitalization projects in Japan! (Karen Severns) 台風18号から、水の脅威を思う。上手にやり過ごす昔からの知恵に学ぶ(須永)。魅力的なリノベーションの事例に励まされます(田中)。美唄と雨煙別にもNPO運営であったことに保存再生の未来を見た。viva! NPO(渡辺)。棟梁の美佐子さんその自邸には7年後の竣工にアフリカ草原の西日が光輪となり宿る(中野)。逃れ出でなんとするミケランジェロの「奴隷」をおもい、カッラーラの石を刻む至福の時(編集長 井出)。静かな北の大地は白く美しく、小さな町の人々は力強く暖かでした(編集長 在塚)。

抄訳：田中厚子=T.A. 古村伸子=K.N. 中野晶子=N.A.